後援会だより

第21号
2016年3月18日発行

編集発行／鹿児島大学法文学部後援会

本誌の案内

○ごあいさつ
後援会会長・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
法文学部長（後援会顧問）・・・・・・・・・・・・・・・・・1
○専門職大学院報告
司法政策研究科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
臨床心理学研究科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
○就職支援室より・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
○主な支援事業の成果報告
就職活動に係る交通費の一部支援事業・・・・・・・・・・・4
留学準備金支援・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
各種実習への支援・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
学生の学会発表支援・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
○保護者の皆様からのメッセージ・・・・・・・・・・・・・11
○平成27年度後援会役員一覧　・・・・・・・・・・・・・・12

後援会会長ごあいさつ

鹿児島大学法文学部後援会
会長　阿多　真紀子

穏やかな年明けになりました。会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のことと拝察いたします。

年の終わりにどのようなことを思い、また始まりにあたってどういう思いをおもちになられたのでしょうか。

人にはそれぞれの道があり、凸凹もその人なりの形や大きさがあるものです。私はなるべくその凸凹を小さくしたいと思って毎年過ごしてきましたが、やはり思い通りにはいかないものです。

線を引いてその上を間違いなく進めればいいのですが、落ちたり外れたりを繰り返してばかりのような気がします。しかし、ある程度の年齢になったときふと思ったのは、外れた道も落ちた場所もそれなりに楽しかったり、その後の生き方の勉強になったりしているということです。

「人生はプラスマイナスゼロだ」という人もいます。落ち込んだときにこの言葉を思うと上を向くことができます。人のスイッチは様々ですがそのスイッチを見出だすと、少しは楽になるのかもしれません。

さて、昨年は法文学部発足50周年を迎え、改めて鹿児島大学において、また地域にとって、法文学部が常に歴史の中枢にあったことを知る良い機会となりました。

また、社会を見渡すと景気の回復の兆しをうかがわせる様々な情報が流れています。今年度の就職も順調とうかがっております。オリンピックの開催も楽しみです。しかし、家計の回復を感じるまでにはまだ少しかかるのではないかと思います。そして、それには社会にきちんと目を向け、何が必要で、何が必要でないのかその取捨選択が大切なのだと思います。

私たちの子どもたちは、しっかりと社会に目を向けその取捨選択をしっかりとし、自分の足元を踏みしめながら歩いていく逞しさをもっているのではないでしょうか。またそうあってほしいと心から思います。

4年間理事としてその任に見合う活動もできないままに過ぎてしまったような気がします。会員の皆様には大変お世話になり感謝に堪えません。後援会がこれからも学生たちの傍らで大切にされ、少しでも助けとなることを心より願っております。

法文学部長（後援会顧問）ごあいさつ

法文学部長　平井　一臣

日頃より、本学部・大学院における教育・研究へのご理解とご支援をいただき、誠にありがとうございます。年が明け、学生たちは期末試験や卒業論文に追われ、また、教職員は各種の入試業務に追われ、大学としては最も慌ただしい時期にあたり

ます。

すでにお伝えしましたように、本年度法文学部は創立50周年の記念事業に取り組み、4月に法文学部50周年記念式典を開催し、秋には『鹿児島大学法文学部50年史』を刊行いたしました。また、同窓会から690万円のご寄付をいただき、学生の海外研修等への支援や法文学部教員の学術出版への助成を目的とした「鹿児島大学法文学部同窓会教育研究助成基金」を創設いたしました。

同窓会関係でもう一つご報告しますと、昨年8月9日に、長崎市内の白鳥公園で開催された旧制第七高等学校の被爆者の追悼式典に参加致しました。ご承知の通り、鹿児島大学の前身は戦前に創設された旧制第七高等学校造士館であり、現在も歌い継がれている「北辰斜めに」は造士館時代に作られた曲です。先の戦争末期の勤労動員に、旧制高校生らは各地に駆り出されましたが、旧制七高生の一部の動員先が三菱長崎工場だったのです。式典が行われた白鳥公園は、旧制七高生が寄宿していた寮の跡地であり、8月9日の長崎に投下された原爆によって七高生も命を落としました。幸いにも死を免れた七高生や工場で一緒に働いていた地元の女子学生の方々が、慰霊碑を建て、毎年9日の夕方に集まり、若くして命を失った七高生を偲ぶ会を続けてこられました。関係者も高齢化し、これが最後の会になるかもしれないとのお話をお聞きし、参加した次第です。集まって来られた方々から色々とお話をお聞きし、これもまた我々が次の世代に語り継がなければならない歴史ではないかと思った次第です。

歴史の継承であるとか、他者の理解という言葉を私たちはしばしば用いますが、そのためには人文社会系の素養というのが不可欠ではないかと考えます。しかし、昨年マスコミなどでも大きく取り上げられた通り、人文社会系学部の縮小・廃止に関する議論が巻き起こりました。人文社会系学部を軽視する考えに対しては、日本学術会議や経団連などから厳しい批判がなされました。本学部が所属する全国17大学人文学部長会議でも批判の声明文を公表したところです。

人文社会系の総合学部として多くの人材を送り出し、また、後援会からも持続的なご支援を受けて教育研究活動を行っている私たちとしては、地方において人文社会系の教育と研究を担うことの意義を改めて確認することが重要であると考えております。これまでの後援会からの多大なご支援に感謝申し上げますとともに、今後の本学部・研究科における教育研究活動に対する一層のご理解とご協力をいただきたく存じます。

専門職大学院報告

司法政策研究科

鹿児島大学大学院
司法政策研究科長　**米田　憲市**

平成27年度活動報告

司法政策研究科は、平成16年4月に、「地域に学び、地域に貢献する」ことを運営理念として、基本的人権を擁護し社会正義の実現のために地域に尽くす法曹養成を担う専門職大学院（法科大学院）として設置されました。以来、法曹養成と社会貢献活動を一体化する取組を推進しています。平成27年度から学生の募集を停止していますが、在学生が修了するまで、研究科としての組織と充実した教育を継続し、また、学生は修了後５年間、司法試験の受験資格を有し研鑽を継続します。鹿児島大学は、在籍学生がいなくなっても、これらの修了生に学修支援を提供することとしています。

さて、今年度は、法曹への登竜門である司法試験において、３名の本学出身の合格者を得ることができました。現在も、一人でも多くの修了生に法曹への道を歩んでもらえるよう、教員・学生一体となって取り組んでいるところです。

例年後援会よりご支援をいただいている「離島等司法過疎地における法律相談実習」は、今年度は2月13日と14日に屋久島で実施しました。相談技法や当事者間の利害調整の技法だけではなく、地域風土を感じ、地域ニーズを知ることで、地域に貢献する使命感、倫理観を涵養するものであり、大学の地域貢献の一環として今後も継続される予定です。

鹿児島大学では、法科大学院での教育に取り組んだ成果を継承し、今後も高いレベルの充実した法学教育を提供することや、法学教育研究のインフラの提供、地域貢献の取組の継続などのために、平成27年3月1日付で「司法政策教育研究センター（以下、センターという）」を設置しました。６月６日には設置記念シンポジウムを開催し、司法修習生や土

地家屋調査士を対象とする「ロイヤリング実践セミナー」の開催、法文学部法政策学科と協力して、学長裁量経費の支援の下、センターが中心となって、法政策学科の学生が法学検定試験を無料で受験できる「チャレンジ・プロジェクト」等を実施しました。センターでは本年1月15日に、九州大学法科大学院と協力連携協定を結び、より広いネットワークの下での法学分野の教育研究の推進を目指します。法律を学んだ者のニーズは「つぶしのきく法学士」から「鍛えられた専門家」へとシフトしています。今後も、法文学部・人文社会科学研究科と協力しながら、鹿児島大学の法学教育の振興に取り組みます。

センターでは、月数回、無料の法律相談を実施しています。是非ご活用下さい。

http://www.ls.kagoshima-u.ac.jp

臨床心理学研究科

鹿児島大学大学院
臨床心理学研究科長　**中原　睦美**

平成27年度活動報告

後援会の皆様には、平成19年度の研究科設置以来、多大なご支援をいただき厚く御礼申し上げます。おかげさまで高度専門職業人である臨床心理士養成に特化した専門職大学院を独立研究科として立ち上げて以降、理論と実務実習を架橋した教育及び臨床研究を継続し、順調に発展してきております。以下に、平成27年度の活動を報告させていただきます。

1　教育体制の充実と活動実績

定年退職等に伴う教員の異動のため、新たに司法・矯正領域（前少年鑑別所首席）、認知症高齢者支援、遊戯療法等の各々の専門家3名が専任教員として4月1日付けで着任しました。新たな戦力が加わり、学外実習では守秘義務の厳しい領域である刑務所見学実習が実現しました。また、本研究科では、デリバリー形式の地域支援活動を平成22年度から継続しておりますが、9月の日本心理臨床学会第34回秋期大会では、発達検査や知能検査の実践を学生教育にリンクさせた地域支援の活動内容について、通算10回目となる学会発表を行いました。この活動には、認知症高齢者への支援活動や国際交流が加わり、さらに厚みを増しました。

2　『心理臨床の広場』インタビューを受けて

平成27年5月6日には、日本心理臨床学会広報誌『心理臨床の広場』の訪問インタビューを受けました。国際医療福祉大学大学院と兵庫教育大学大学院の博士後期課程在籍の二人の院生が来校し、ティーチング・クリニックである付設心理臨床相談室の年間相談件数が1,300～1,500件に上ることや設備、個別指導体制の充実等について賞賛いただきました。研究科の日々の実践を外部の方に評価され、研究科の成果を見直す機会となりました。設置以来、就職率は100％を維持し、うち3割が家裁調査官補や少年鑑別所法務技官、県や市町村の心理職などを占めていることや臨床心理士試験合格率は全修了生の98％が合格していることなども本研究科の特徴であり、一人ひとりの学生・教員の努力の賜であると確認できました。

これらの活動実験は、後援会からのご支援にも依っております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。流動的な社会情勢のなか、社会に貢献できる質の高い臨床心理士養成を目指して今後も邁進していく所存です。上記の活動等の詳細は、臨床心理学研究科ホームページに掲載してございますので、是非ご覧ください。

http://www.leh.kagoshima-u.ac.jp/kumcp/

就職支援室より

法文学部後援会は、法文学部独自の就職支援室の運営を支援しています。就職支援室では就職相談や模擬面接などの就職指導を行っています。

◆平成27年度就職支援室活動報告

法文学部就職支援室
室長　**藤田 紘一**

今春卒業する4年生の就職内定率は、平成28年2月1日現在80.1％で前年同期に比べ4.9ポイント上回る結果となりました。これは企業の業績回復を背景に前年に引き続き採用意欲が高まったことに加え、とくにリーマンショック以降採用を極端に抑えていた大手家電メーカーも、積極採用に転じたことが大きく影響したものと思われます。

3月に本格的に就職活動を開始する3年生は、選考開始（内定だし）が現在よりも2か月前倒しの6月よりスタートすることが決定しており、過去に例を見ない過密スケジュールとなる厳しい状況が予想されます。

就職解禁までに知っておくべきポイントを以下に述べますので、よく理解し就職活動に一生懸命取組んでもらい、目指す志望企業に内定していただきたいと思います。

1. 活動期間が短くなる

就活解禁は3月といっても、それまでにしっかり情報収集をして志望業界や職種などを絞り込み就職活動に臨まなければ厳しい戦いになる。

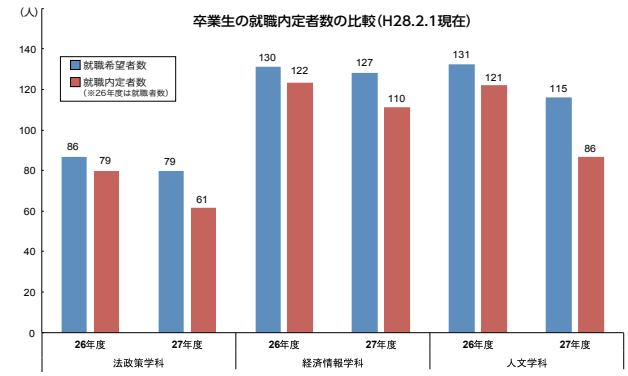
2. 受験できる企業が減る

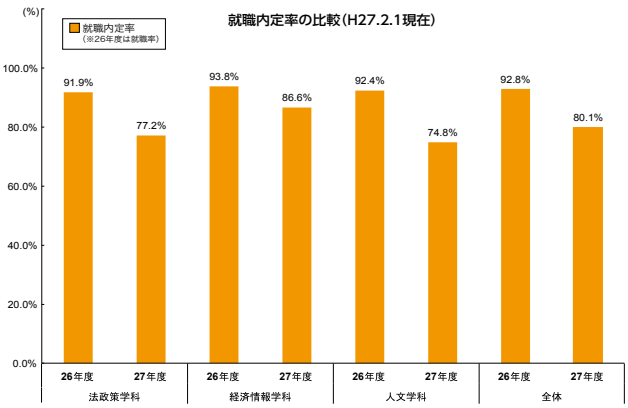
「自分はどの会社、業界に行きたいのか」などしっかり考えて入念な準備と計画を立てる必要性が高くなっている。

3. 一般的なスケジュールに乗らない企業が増える

スケジュール過密化の影響や目標とする採用人数への懸念から、水面下で一般的なスケジュール以外の採用・広報活動を行う企業が増えている。

そもそも外資系企業やIT企業は上記のスケジュールにとらわれない採用活動をしていることが多く、ソフトバンクや楽天など一部企業は時期にとらわれず通年採用を明言している。したがって上記企業等を受験する学生は、例年以上に情報収集しておくことが求められる。





主な支援事業の成果報告

就職活動に係る交通費の一部支援事業

法文学部後援会では、学生が就職活動中に支出した交通費の一部を補助する事業を行っています。少しでも学生の負担を軽減できればと願っています。ここでは、この支援事業を利用して就職活動を行った学生からの報告を掲載しました。学生たちの就職活動の現状を知る参考にしていただければ幸いです。

◆交通費支援を受けて

経済情報学科４年　**田中 眞貴**

平成28年度卒の学生の就職活動は例年とは大いに異なり、私は戸惑いや焦りを感じながらも、３年生の３月から本格的に就職活動を始めました。それ以前にも３年生の夏にインターンシップに参加したり、情報収集をしたりと活動しており、３年生の３月にはアルバイトを辞め、就職活動に専念できるようにしました。アルバイトを辞めることは予定していたことだったので、それまでに貯めた貯金で就職活動にかかる費用を賄っていました。しかし、私の活動範囲であった福岡や熊本、宮崎に何度も足を運ぶと、思いのほか交通費がかさんでいきました。

そんな折、偶然大学の掲示板で、後援会による交通費支援の張り紙を見つけ、就職活動にかかる交通費の一部支援事業の存在を初めて知りました。その内容は、後援会に加入している学生に対し、鹿児島県外での企業説明会や採用試験に行った際に支出した交通費の一部を補助していただけるというものでした。１人につき１回、最大で5,000円を受け取ることができました。この後援会の支援のおかげもあり、私は８月に内定をいただくことができ、満足のいく形で就職活動を終えました。

就職活動中はなかなか上手くいかないことばかりで、悩んでしまうことが多々ありました。そんな私と共に励ましあってくれる友人や、支えてくれる家族や先生方の存在が大きなものであったと実感しています。また、たくさんの人達と出会えたことも、就職活動において重要なことでした。自分とは違う環境で生活している他の大学の学生や、社会人として働いている方との出会いは、私に刺激を与え、様々なことを学ぶことができる機会になりました。

就職活動は大変なものですが、自分自身を見つめ、自分を成長させてくれる絶好の機会でもあるので、これから就職活動をする後輩たちにも頑張ってほしいです。就職活動で大切な情報はどこに転がっているか分からないので、常にアンテナを張っておくことが大切だと思います。

最後になりますが、このような支援をしてくださった後援会をはじめ、私を支えてくれた多くの方々に心から感謝します。ありがとうございました。

◆交通費支援を受けて

人文学科 4年　**西野 雄大**

私が就職活動をはじめた時期は企業の説明会等が本格的に解禁される3月からでした。この年から就職活動のスケジュールが大きく変わること、また、私のスタートが周りの就活生に比べて遅かったという自覚があったこともあり、就職活動をはじめてからは毎日必死で業界の研究や自己分析に励みました。私は出身が福岡県なので、就職地は地元の福岡県か東京都を考えながら企業の説明会に足を運んでいましたが、県外での就職を希望すると目を背ける事ができないのが交通費や宿泊費といった金銭的な問題です。就職活動でお金が必要になるということは以前からよく聞いていたので、自分でも事前に貯金をしていましたが、実際にはじまってみると出費は予想以上に多く、東京に何度か足を運ぶうちに貯金はあっという間に底を尽いてしまいました。もちろん、就職活動中にまとまった日数のアルバイトをすることはできません。そのようなときに、就職活動をしていた同じゼミの友人から、後援会に加入している学生を対象に、就職活動中の交通費の一部を補助してくれる支援事業が行われているということを聞きました。私はその支援事業で支給して頂いたお金で、東京の合同企業説明会にいきました。私の最終的な就職先はIT業界のシステム開発に携わる企業ですが、その企業に出会ったのもその合同企業説明会の場でした。最初の個別説明会や面接から学生に交通費を支給してくれる企業はほとんどなく、県外での就職を希望する学生は企業先に顔を出すだけでも多くの費用がかかります。そのため、金銭的な問題をいかに解決するかが県外での就職活動の結果を左右すると言っても過言ではないとすら、就職活動を終えた今となっては思うところもあります。後援会の支援のおかげもあり、私は8月に希望していた企業から内々定をもらうことができました。このような金銭的な支援をして頂いた後援会の皆様にはこの場を借りて深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

留学準備金支援

法文学部後援会では、会員の皆さまからお預かりした会費を、学生が国内外で行う調査実習の旅費や、教育・研究活動の経費の補助に活用しています。ここでは、その一部を成果報告としてご紹介します。

◆祥明大学校（韓国）

経済情報学科４年　**本山 莉乃亜**

日本と韓国は「近くて遠い国」と表現される。しかしいつまでそう言われ続けなければならないのだろうかと、２回の研修で韓国を訪問していた私は留学前から思っていた。私にとっては大切な仲間と家族がいる国なのにと。１年間のあいだ多くの韓国人と出逢うなかで、目には見えないが、出逢いによって心が動く、日韓の希望を感じられる瞬間があるだろう。私は１人でも多くの人にそれを体験してほしい。そして留学中、留学後の人生において自分が誰かの人生に参加することで、いつか私が日韓の希望を感じるきっかけになれればと思った。そのための私になれるよう留学を選択した。

韓国語：今まで韓国人と交流する中で、私の韓国語力が十分ではなく悔しい思いを幾度と経験してきた。確かに、外国人と交流する際は言語外コードを交えながらでも十分な側面もある。しかし、高校生の頃から勉強してきた韓国語を一度しっかり身につけたかった。自分の想いを相手国の言葉で伝える。それが相互理解には不可欠だと思うからだ。結局留学中２回TOPIK（韓国語能力試験）を受け、最終的に５級を取得することができた。（最高級は６級）３カ月通った語学堂での知識と、毎日の何気ない会話の中で自然と韓国語が口から出るようになり、いつからか韓国語のほうが自分の心情や細かい感情を表せる部分も出てきた。

日本語教育・韓日文化コンテンツ：私は韓国で

日語教育学科に所属していた。日本語はもちろん、日本の時事問題や文化など日本について幅広く学ぶ学科だ。韓国の学生と一緒に授業を受けながら、「自分の母国語（日本語）はこうやって学ばれているのか」「なんでこんなことまで知っているのだろう」と驚かされることもあれば、「それは違うと思う」と反論したくなることもあった。また、教授全員が日本語が堪能な学科のため、授業は日本語と韓国語両方を使って行われるものが多い。普通、留学に行くと日本語が一切ない中で苦労しながら成長するものだと思う。しかし、留学先で日本語を使い、日本について学ぶこの少し不思議な環境はほかの国とは違う面白さがあるのではないかと思った。

正直、留学前から私にとって韓国は外国、海外という感覚はなかった。しかも、同じアジアであり、似ているところがとても多い。あまり違いを感じにくくなっている中でも違いを感じるとすれば、韓国の「その場の対応力」だろうか。とにかく日本に比べて融通が利く。悪く言うと「適当」だが、なんとかなってしまうことが本当に多い。これはいい意味でも悪い意味でも韓国を表す大きな特徴の一つだと思う。

韓国留学は高校生の時からの夢だった。したかったからしたのだ。今後は留学期間を含め、韓国に関わってきたすべての時間を活かして、長いスパンで私自身にそして関わってくれたすべての方に、社会に対して成果として還元できる人間になれるような道を進みたいと思っている。

日韓夫婦の子供に日本語を教えるボランティア

◆フィリピン大学（フィリピン）

経済情報学科４年　**田中 遼平**

留学の目的は３つあった。１つ目は、国際社会で活躍するための知識、忍耐力、語学力、人間性の向上を図ること。留学を終えてその成果はどうだろうかと考えてみると、結局その成果はこれから試されるのだろうとは思いつつ、決して留学が無駄ではなかったと確信している。次に、地に足の着いた学びをすること。これは大学に籠らず、積極的に動き、現場や現実を目で見て考える、頭より足を使うという意味だった。これも１年間を通して、授業のフィールドワーク、スタディツアー、NGO 活動等に参加し、日本の社会起業家の方と関わり、教授の調査に加わったりと、さま

ざまな地方に出かけて現地の人々と話し、他ではできない経験をしたことで達成できた。３つ目に、将来を見据えたネットワーク作りを挙げていたが、大学教授、クラスの友人だけでなく、中国、韓国、ASEAN 諸国、イラン、アメリカ、オーストラリア、ドイツ、アフリカ諸国など世界各国からの留学生と生活を共にし、友達のネットワークを作ることができた。また、大学関係者だけでなく、現地 NGO や研究所所員、日本人の社会起業家、NGO 活動家、フィリピン研究者など、多種にフィリピンに関わる方々と関係をもつことができたことは、留学の大きな成果と言える。しかし、帰国した今一番の成果はなにかと考えてみると、将来の進路に悩み抜き、一年かけて反芻しながら、揺れながら、最後には一つの結論を出せたことである。この悩む時間を無制限に取れたこと、悩み抜いたこと、そして迷いをすべて払い去ったことが、留学後を振り返って一番の成果であったように思う。卒業後1、２年の話ではなく、10年、20年、30年という自分の人生を踏まえた上で、なにを仕事にするか、どのように働くか、それはつまり、どう生きていくかというところまで考え抜いて、現時点での一つの終着点を見ることができた。社会が動くスピードが増すなかで、じっくりと思案し、立ち止まって考える期間を作ることは難しい。そ

の中でとことん自分に向き合うことができたフィリピン留学は、将来迷ったときに立ち戻る過去であり、また礎となり踏み台になるものである。

◆清华大学（中国）
「清華大学での半年間の生活を振り返って」

経済情報学科２年　**川西 未緒**

今回の事業内容は、清華大学へ汉语進修生として半年間修学するというもので、鹿児島県が清华大学と協定を結んだことによって実現したものです。私は以前から中国語を大学の授業の第二言語として勉強していたため、中国語に関心がありました。また、清华大学は北京大学と中国国内で一、二を争うトップの大学だと耳にしていたため、清华大学自体にも大いに関心がありました。日本国内では北京大学より知名度は劣るものの、数多くの知識人を輩出していることは確かです。一番有名な卒業生として挙げられるのは習近平主席ではないでしょうか。世界的エリートを数多く輩出している清华大学で半年もの間勉強する機会を頂けたことは自分にとって自分の見識を広げる素晴らしい経験となりました。まず、自分の周りはクラスメイトや汉语進修生を担当してくださる先生方を除いて全くと言っていい程に英語が通じないという環境であったこと。英語が話せれば何とかなるだろうという考えは中国に渡って3日ほどで捨てました。次に、自分から中国人の学生たちの輪に入らないと中国人の友達はおろか、ランゲージパートナーも作ることが難しいということ。在中期間の長い方と友達になれば、日本語を勉強したがっている中国の方を紹介してもらえることがありますが、やはり自分で交流会の情報を手に入れて交流会にたくさん参加したり、学内のサークルで友達を作る方が確実かつ手っ取り早く中国人の友達を作れると思います。また、清华大学には多くの日本人留学生がいます。色々な大学の色々な学部、学年、研究生の方がいらしている為、自分の専門分野とは違った話や有意義なお話をたくさん聞くことができました。上記のように、多くの方と知りあうことで数多くのことを経験する機会を得られたと思います。そして学習において私は初級コースでしたので、午前中のみの授業でしたが、午後から自分で選んで受講できる授業もありました。授業は45分×4コマで、アッという間に授業が終わってしまいます。宿題が時折出されるものの、若干の物足りなさを感じることもありました。自分は午後の空いた時間に HSK（中国語検定）の勉強や中国語のニュースアプリで新聞記事を読んだりしていましたが、学外の学習塾に通う方もいました。個人的には座学以上に中国の方とたくさん話す機会を持つことの方が中国語の進歩に大きく貢献してくれると思います。ランゲージパートナーを作れば、一層質の高い勉強が可能となります。また、ランゲージパートナーと行動を共にすることで一層多くのことを経験できると思います。自分はランゲージパートナーが研究生で忙しかったため、週一回の勉強会や遊びに行くくらいでしか会う時間を設けられませんでしたが、手料理を振舞ってもらったり、遊びに行ったり、勉強を見てもらった日々は忘れられない楽しい思い出です。これらの経験を通して、帰国後も中国語の勉強は続けていこうと思いましたし、他の国々の方と触れ合う楽しさを知り、アジア全体の情勢にも関心を抱くようになりました。視野を広げ、多くの人と関わる大切さを忘れず、県を越え、国を越えて世界に貢献できる人材になりたいという意識を持てた有意義な留学生活を送ることができました。

◆シドニー工科大学（オーストラリア）
「オーストラリアでの一年を経て」

人文学科４年　**迫田 真理恵**

まず今回の交換留学のきっかけとしては、大学２年の時に北米教育研究センターでの１ヶ月間に渡る海外研修での経験です。その時に、現地の大学生との交流を通して日本の教育システムとの違いに刺激を受けたことから、チャンスがあれば長期留学をしたいと思いました。

留学前、１年間という比較的長期の海外生活に多少の不安はありましたが、語学の学習のほかに自分のキャリアについて考えることを目的に120% の力

で頑張ろう、と準備してオーストラリアへ旅立ちました。ところが、聞き慣れていなかったオーストラリア英語に全く対応できず、最初の１ヶ月間はコミュニケーションさえままならない、大変な時期でした。そこで、このままじゃじゃいけない！と気持ちを切り替えて積極的に行動を始め、どんどん新しく英会話を覚え、国際交流にのめりこんだ時期でもありました。過去に留学をしていた先輩から「自分から行動しなければ何もやって来ない」と言われていたので、旅行やパーティーなどリラックスできることから、インターンシップやボランティアなど自分を高める活動まで、幅広い分野で積極的に行動するように心がけていました。様々な環境でたくさんの素晴らしい人たちと出会い、とても良い経験になったと感じています。

aboriginal dance

シドニー工科大学という国立総合大学に２学期間在籍し、オーストラリアの歴史や文化であったりビジネスやフランス語など様々な分野の勉強をしていました。現地の学生と同じ条件の中、第二言語でプレゼンテーションを行ったり試験を受けたりするのはとても難しく、落ち込むこともありましたが、それと同時に大きなやりがいを感じることもできました。

旅行は度々行きましたが、旅先で出会う同年代の人々が、人生を急がず時間をかけて、自分のしたいことを探している姿は、リラックスして生きる楽しさという新たな価値観を私に与えてくれました。また、戦争や経済的不安により難民としてオーストラリアに移住している人達が多くいることを知り、その人達と関わる機会をもつことで、日本と海外の違い、海外で何が起きているかにとても感心を持つようになりました。そういう新しい価値観や異文化との出会いは今後の私自身のキャリアや人生観に少なからず影響を与えてくれるものだと感じています。そして、オーストラリアに行かなければ出会うことの無かったであろう貴重な経験や感情を味わえたことにとても感謝しています。

慣れない環境での生活の支えになるのは、こうなりたい、これをしたい！という強い気持ちだと思うので、それを日々忘れずにいてほしいな、と今後留学を考えている方にアドバイスしたいです！ 一年間、海外で様々な経験を経てどれだけ自分が成長できたのかは数字では測ることができませんが、確実に人生において一番素晴らしい貴重な時間であったと思っています。留学を支援してくださった大学の関係者並びに両親や友人に感謝の気持ちでいっぱいです。

◆淡江大学（台湾）
「台湾 淡江大学に留学して」

人文学科４年　**前原 未来**

私は鹿児島大学の交換留学生として留学する機会をいただき、2014年２月から2015年１月まで約１年間台湾の淡江大学で学びました。淡江大学では昼間に現地の大学生と同じように授業に参加し、夜に留学生向けの中国語の授業を受けていました。台湾に着いたばかりの頃は周りが何を話しているのかよくわからず、自分の思うように伝えることもできませんでした。それまで自分なりに一生懸命勉強して大好きだったはずの中国語が見たくも聞きたくもなくなって放棄したいと思った時もありましたが、それでも地道にまじめに休むことなく授業に出て少しずつ単語数や使える言い回しを増やしていきました。その甲斐があってたまたま買い物の途中に困っている日本人旅行客を見かけた時、通訳をしてお手伝いができたときは達成感を感じました。また、台湾で知り合ったわたしとは文化の異なる友達と将来の夢について話したり悩みを相談し合ったりと、中国語がわかるようになったことで海外に住む同じ世代の考えていることや考え方を知って、自分自身もの見方も変わりました。

淡江大学卒業式

私は中国語の他に台湾での日本語教育についても興味があったので、日本語学科の授業を比較的多く

履修しました。授業の中で日本語を学ぶ台湾人と接し、一緒に劇を作ったりプレゼンテーションをしたりする中で台湾における日本語教育の実情を知り、自分なりに問題点などを見出だすことができ、これもまた留学の大きな収穫だと思っています。

その他にも台湾で過ごすうちに台湾の原住民についても興味を持ち、博物館に行ったりいくつかの部族についてはその伝統や生活様式を勉強したりしました。そのうちに日本との歴史的かかわりも見えてきて、日本と台湾の関係についても考え直すきっかけとなりました。もともと興味があったものだけではなく、視野を広げられたことで新たな疑問や発見ができ、自分を大きく変えた一年でした。

◆レンヌ第二オート・ブルターニュ大学（フランス）
「フランス人の日本熱を感じた1年間」

人文学科４年　**松下 知子**

今回の交換留学で、私はレンヌ第二オート・ブルターニュ大学付属の語学学校に2学期のあいだ通わせていただきました。当然ながら、授業は全てフランス語ですし、語学学校はレンヌ第二大学の学内に併設してありますので、生のフランス語が聞こえる生活環境でフランス語を学習することができました。文法、文化、発音矯正等、何種類かの授業があり、中でも自分の声を録音して先生に指導をしてもらう発音矯正の授業はとても新鮮で、留学先でしか受けることのできないきめ細やかな授業だったと思います。また、2学期目の新しいレベルのクラスでは“オプション”といって、学生が興味のある分野を選んで学ぶことができる授業が追加されました。私は現代アートの授業を選択し、絵画の分析方法について勉強をすることができ、満足しています。

留学先の土地で、本当に様々な体験をすることができたのですが、中でも個人的に大きかったのは、日本に興味を持っている人々の熱を直に感じることができた点です。ブルターニュジャポンという日本語を学習したいフランス人の集う教室に参加させていただいたり、レンヌ第二大学の学部の日本語の授業にお手伝いとして参加させていただいたり、アソスィアシヨントモダチという日本文化研究学生団体（サークルのようなもの）に所属したりと、日本とフランスの交流が盛んにできたと思います。特に印象的だったのは、Nihon Breizh Festival という祭典の存在です。レンヌ第一大学と第二大学合同で主催されレンヌで開催される、二日間に渡る日本文化交流会なのですが、長年にわたって毎年開催され、盛況だそうです。レンヌという一地方都市においてこのようなイベントが活発であることに驚きを隠せませんでした。

この留学期間、毎日本当に貴重な体験ができました。留学に至るまで、また留学中、留学後お世話になった全ての方に心から感謝しております。ありがとうございました。

各種実習への支援

◆大前ゼミ冬合宿
「ディズニー・環境コンテスト」

経済情報学科３年　**南 ひかり**

12月24日～25日に行った東京ディズニーリゾートでの研修では、キャストさんが主体的に動けている理由を探しました。そして「評価する」ことが大切であるということを学びました。相手と互いに評価しあうことでやる気が引き出されるということを知り、私たちも真似し、自分たちの組織内でも主体性を強くしていきたいと思いました。

12月26～27日にかけて国立オリンピック記念青

少年総合センターにて開催された『第13回全国大学生環境活動コンテスト（ecocon2015)』には全国から43団体が参加し、そのなかでグランプリとなる環境大臣賞を受賞することができました。私たちは市民や企業と連携しながら、エコスイーツ活動という生ごみの循環システムを利用した活動を行っています。多くの市民の Involvement（巻き込むこと）を実現するには私たちの Commitment（深く関与すること）が必要であるという観点からプレゼンテーションを行いました。

今回の合宿を通して、私たちの組織をもっと強くしたいと感じました。そうすることで、ユニークなアイディアが生まれ、今後のエコスイーツ活動をさらに発展させることができると思います。また、今回このような合宿が行えたのは保護者の方々のご支援のおかげです。心から感謝いたします。ありがとうございました。

◆人文学科フィールド学実習（考古学）「鰻窯跡調査」報告

人文学科３年　**松山 初音**

2015年８月26日から８月31日の６日間、渡辺芳郎先生と石田智子先生、そして19人の学部生・院生が指宿市に所在する鰻池付近の窯跡の測量や分布調査を行いました。この窯跡は文献などの資料が発見されておらず、何も情報がない中での調査となりました。

窯跡の周りは植物が生い茂っていたため、地形を測量しやすくするための伐開作業から始まりました。ある程度の範囲を伐開し終えたのち、４つの班に分かれて窯跡周りを測量しました。それぞれの班で自分たちがとれる範囲で等高線を入れていき、作業終了後や休憩時間を使ってお互いに進捗状況や重なり合う等高線などを確認し合いながら作業を進めていきました。また、地形の断面図の作成に使用する標高を出した班もありました。機材の設置がうまくいかなかったり、他の班と記録がずれていたりすることもありましたが、最終日までには無事に測量を終えることができました。

この調査の最中に、地元の方から声をかけていただいたり、差し入れを頂いたりもしました。地域の方々の温かさに触れることができたのも、この実習の一つの収穫ではないかと思います。

フィールド学実習は、事前にフィールド学実験という講義で実習のために必要なスキルを学んだ上での調査となっています。２年生は初めての実習で経験のないことばかりだったと思いますが、慣れない中でも学んだことを実際の作業にうまく活かせていたのではないかと思います。また、３年生は班の中心になって作業を進めなければならない立場にありました。そのため責任の重さや指導の難しさを痛感し、思い通りに作業が進まないことに焦りを感じたこともありました。しかしこの実習で様々な経験をし、今までの知識を活かしたり新たなスキルを得たりと、参加者それぞれが有意義で綿密な時間を過ごしたのは確かだと思います。今回の実習での経験を、今後の学習や研究で活かしていきたいと思います。

◆「私のアルバム―やがてのために―」作りを通して学んだこと

臨床心理学研究科１年　**前之園 千晴**

私たちは、霧島市地域包括支援センターの霧島市「私のアルバム」作成委員会主催の下、11月７日～８日の計２日、霧島市国分いきいき交流センターと今日館デイサービスに行きました。そこで、65歳以上の高齢者の方に、それまでの人生や思いを大切にした支援を行うために必要な事柄を聴き、書き綴る活動に参加させていただきました。「私のアルバム」は、地域住民への支援を行う地域包括支援センターや社会福祉協議会、介護サービス事業者が、介護予防や介護サービス、福祉サービスの利用、社会参加活動に関する情報提供事業の一環として私のアルバムを提供するほか、住民同士で行われるグループ活動、サロン活動や生活支援における相談援助として活用されることを想定しています。私たちは臨床心理士を目指しており、認知症の高齢者の方々に対して実際にどんな関わり方をしたらよい

のかを現場で働いていらっしゃるスタッフの方々から学ぶことができました。また同時に、自分たちの家族のことや将来のこと、自分たちが地域にどう貢献したいのかなど、さまざまなことを考える機会をいただき、講義では学ぶことのできない活動をさせていただきました。法文学部後援会の皆様には、こうした活動に必要な交通費の一部を負担して頂いております。後援会の皆様のおかげで、貴重な経験をすることができ、深く感謝申し上げます。

今後も、地域の方々へ貢献できる活動を続けていきたいと考えております。変わらぬご支援のほど、よろしくお願い致します。

学生の学会発表支援

◆日本動物心理学会第75回大会への参加

人文社会科学研究科人間環境文化論専攻２年　**大川 あゆみ**

メスマウスにおけるエストロゲンの情動調節作用と通常状態の視床下部ストレス関連ホルモンのレベルについて、卒論の実験結果と追実験の報告を行いました。ポスター発表を行いましたが、英語での発表と質疑応答であったため、準備は大変でしたが、自らの研究に対する理解は深まりました。特に、多くの学生や先生方にご意見いただき、自分では気づかなかった点や他の要因との関係などをディスカッションできたことは大変ありがたい機会だと感じています。

さらに、動物心理学会という狭い分野の学会ではありますが、演題は多様で、心理学や動物行動学、生理学、神経化学等、多様な専門の方のお話を伺える機会でもありました。とても学際的な学会ですので、自らの興味をあらゆる方向に広げることができました。

また、ポスター発表だけでなく、口頭発表も全て英語による発表であり、日本語の発表を聞くよりも細部の理解は難しかったですが、シンポジウム等を含め、今まで参加した学会よりもネイティブの方の発表が多くなされていました。ネイティブの方の発表は、研究の内容も多様であると同時に、プレゼンも面白く、相手への伝え方という点も大変参考になりました。

もちろん、大学院の授業の中で学ぶことは多いですが、学会への参加は、普段はお話しできないような方とディスカッションしたり、発表を聞いたりすることができ大学院の中だけではできない経験だと感じました。

保護者の皆様からのメッセージ

保護者の皆様からいただいたお便りの一部をご紹介します。

◎法政策学科４年 保護者

光陰矢のごとし

あっという間の４年間でした。

目を閉じると入学式に向かうスーツ姿の息子が脳裏に浮かびます。

初めてのひとり暮らし、知らない土地で大丈夫だろうかと心配していたことがうそのように４年間で息子はたくましく成長しました。

様々な壁にぶつかり、くじけそうになったこともあったと思います。しかし、そこにはいつも励ましてくれる先生方、友達、先輩、後輩の存在があったと思います。自分を支えてくれた人たちがいたからこそ、今の自分があるのだと思える出来事がたくさんあったのではないでしょうか。その自分を支えてくれた人たちに対する感謝の気持ちを常に持ち続けて、これからの人生を歩んでいってほしいと思います。

息子の卒業のお祝いは、総会の後の歓談会でいただいた“きばいやんせ”で乾杯したいと思っています。

◎法政策学科２年 保護者

入学式で、真新しいスーツに身を包み、喜びの中にも緊張した息子の姿を、昨日のことのように思い出します。「ちゃんとやっていけるのだろうか？ 友達は出来るだろうか？」と、心配ばかりの

毎日でした。

ゴールデンウィーク、夏休み、冬休みと、帰省してくる息子は、その度にしっかりとした顔になってきたのが分かり、嬉しくもあり淋しくもあり・・・。昨年の秋からは、アルバイトを始めたことから、帰省の回数・滞在日数も減り、メールや電話の回数も減りました。

『便りのないのは良い便り』と思い、日々成長しているであろう息子を心から応援しています。

昨年・今年と、後援会総会と懇親会に参加させていただきました。先生方や保護者の皆さんと、様々なお話ができ、楽しく有意義な時間を過ごすことができました。良い機会を与えていただいていることに、本当に感謝しています。

新幹線で日帰りのハードスケジュールにはなりますが、来年もまた参加させていただくことを楽しみにしています。

◎経済情報学科４年 保護者

「息子の成長に思いを寄せて」

息子が鹿児島大学に入学して、早いもので３年と９ヶ月が経ちました。

本来であれば、就職活動も終わり内定を得て、新しい人生のスタートラインを前にして、希望と不安に胸を膨らましている頃だと思います。

しかしながら、息子は自分の人生をさらに有意義なものにするべく、１年間休学して単身海外へ行きました。時折ラインで連絡を寄越しますが、無事に過ごしている様子でほっとしています。高い英語力とグローバルな視野、かけがえのない経験などをお土産にして、２月には元気に帰って来て欲しい、これが今の私の願いです。

そして帰ってきたら、自分の将来をしっかり見据えて、行くべき道を定めて、積極的に行動して欲しいと願っています。

親としてはあたたかく見守って、就職活動にかかる費用と笑顔と励ましの言葉で、息子をサポートしていきたいと思います。

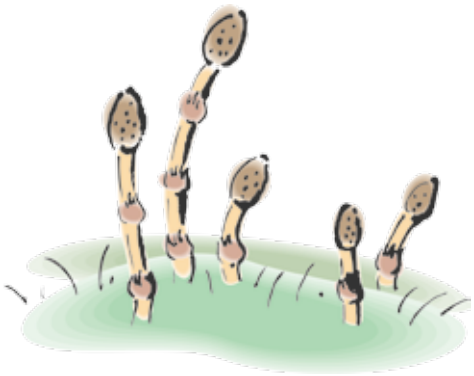
少しでも息子の力になるのであれば、「将来の自分自身のために、今できることを精一杯やりなさい。悩みがあれば何でも相談にのる」と伝えたい、私自身が経験してきた就職活動や仕事への想いなども伝えてみたい、と考えています。

さて、先日の後援会総会・懇談会はありがとうございました。

後援会のこれからのますますのご発展を祈念して、お礼の言葉とさせていただきます。

◎経済情報学科４年 保護者

仕事の都合で今年も懇談会のみ夫婦で参加させて頂きました。平井学部長やゼミの王先生をはじめ多くの大学の先生にビール片手にざっくばらんにお話を聞かせて頂くことができ、大変有意義でした。このような場を作ってくださる鹿児島大学法文学部に娘が在籍できて本当に良かったと感謝しております。



平成 27 年度後援会役員一覧

会　長：阿多真紀子　　副 会 長：秋丸幸子
顧　問：平井一臣　　常任理事：桑原季雄
理　事〔保護者・社会人学生(本人)〕：
（法政策学科）杉山まゆみ、永留宏幸、福田智子
（経済情報学科）阿多真紀子、秋丸幸子、石堂敦志
（人文学科）高橋絹代
（人文社会科学研究科）寿 洋一郎
（司法政策研究科）田丸博子
（臨床心理学研究科）前之園眞弓
理　事〔教　員〕：
（法政策学科）壹岐道隆、相浦 聡
（経済情報学科）石塚孔信、三浦 壮
（人文学科）飯田昌子、福永善隆
（司法政策研究科）伊藤周平
（臨床心理学研究科）宇都宮敦浩
監　査：野間尚宣、村山陽平　　監事：上國料 宏

問い合わせ先　**鹿児島大学法文学部後援会事務局**
〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-30　電話099-285-7510（7602）　FAX 099-285-7609
E-mail kouenkai@leh.kagoshima-u.ac.jp　後援会ホームページ　http://www.kadai-houbun-kouenkai.jp/